

# 熊川陶窯址と水崎（仮宿） 遺跡からみた日朝交流

李 泰 勳

目次

はじめに

一 熊川陶窯址

(一) 立地条件と景観

(二) 登窯の分布と特徴

(三) 出土遺物

(四) 操業時期

二 齊浦の開港と交易の拡大

(一) 齊浦の開港と倭館

(二) 齊浦の交易ネットワーク

三 齊浦湾の水中遺物

四 水崎（仮宿）遺跡

(一) 遺跡の景観

(二) 出土遺物

(三) 遺跡の性格

おわりに

はじめに

近年、韓国では各地方の自治体によって地域の文化的景観を整備して観光資源を確保するための事業が活発に進められている。このため、歴史的遺跡に対する関心が高まって自治体の支援のもとで発掘調査が進められ、遺物に対する科学的分析も積極的に行われている。そのなか、一四〜一六世紀の日朝交流を垣間見る上で非常に重要な遺跡に対する発掘調査と報告も少なからず行われている。

その一つが熊川陶窯址（以下、熊川窯と略称）である。熊川窯は、早くから日本との関係から注目され、主に地表調査を通じて採集した陶磁片を検討して、日朝陶磁交流の一端を把握しようとする研究が行われていたが、より実証的な研究は慶南発展研究院歴史文化センターによる二〇〇一年四〜九月の試掘調査<sup>①</sup>、翌年六〜十一月の文化財発掘調査と報告を待たねばならなかった<sup>②③</sup>。

熊川窯の近辺には一五世紀はじめ、日本人渡航者に対する朝鮮政府の指定港として富山浦（釜山浦、釜山市東区凡一洞付近）とともに開港された齊浦（乃而浦、慶尚南道昌原市鎮海区齊徳洞）がある。一四二六年には塩浦（蔚山市北区塩浦洞）が追加され、一五一〇年の三浦の乱が勃発するまで三浦体制が続いた。その後、一五一二年に〈壬申約条〉が締結され、齊浦が

再開港されることになり、朝鮮の対日窓口の役割を果たしていたが、一五四四年に蛇梁の倭変が起こり、再び閉鎖された。三浦の乱前の三浦のうち、熊川県に属した齋浦は日本人往来者および恒居倭（朝鮮政府の指定港である浦所に居住した倭人）の数がもつとも多く、交易活動も盛んに行われており、周辺住民との交流や密貿易も絶えない浦所であった。これらに関してはいくつか先行研究が蓄積されており、ある程度その全貌が明らかになっている。<sup>4</sup>

一方、文献史料には現れてこないが、当該期の日朝交易品の一端を占めていたと推定されるのが朝鮮産の陶磁器である。二〇〇〇年を前後して、関連遺跡に対する発掘調査が熊川窯をはじめとして日韓両国において活発に行われている。

日本側の遺跡として本稿では、対馬の水崎（仮宿）遺跡（以下、〈仮宿〉と略称）をとりあげ、日朝陶磁交流について検討してみたい。〈仮宿〉は、長崎県美津島町教育委員会が一九九六年と九七年に基礎調査を、<sup>5</sup>二〇〇〇年には同町の文化財保護協会が美津島町尾崎仮宿において二〇〇〇平方メートルの調査区域を設定して発掘調査を実施した（〔図5〕参照）。<sup>6</sup>熊川窯と〈仮宿〉の調査報告書およびこれらを参考にした一部の先行研究では一四〜一六世紀の朝鮮産の陶磁器が日本へ伝来されたことについて言及しているが、<sup>7</sup>両遺跡の遺物に対する比較検討および陶磁交流の実態に関する研究成果は未だ充分ではな

いと言えよう。

特に従来の日朝陶磁交流に関する研究では、豊臣秀吉の朝鮮出兵（壬辰・丁酉倭乱、一五九二〜九八年）に際して多くの朝鮮陶工を日本各地に連行して来たことが契機となり、江戸時代の日本の陶磁文化発展に大きく寄与したという点に焦点が当てられてきた反面、壬辰倭乱前の陶磁交流に対しては少なからざる研究課題を残している。<sup>8</sup>もちろん、このような研究傾向には史料制約があるという要因があるが、近年、日韓両国において関連遺跡に対する調査が活発に行われているので、考古資料を検討することによって、その実態をある程度把握できるようになった。

このような観点から本稿でとりあげる熊川窯と齋浦湾、そして〈仮宿〉の出土遺物を比較検討して相互間の陶磁交流を把握しようとした片山まび氏の研究成果は注目に値する。<sup>9</sup>しかし、片山氏の研究は高麗・朝鮮時代に朝鮮半島各地の陶磁生産と流通、そして日本への伝来という広範なテーマを扱っているもので、これもやはり詳論というまでにはいかない。

筆者は、高麗末の倭寇と高麗・朝鮮の倭寇懐柔政策、そして浦所を媒介とした朝鮮前期の日朝関係について研究しており、まず浦所周辺地域の窯址を通じて日朝陶磁交流の一端を把握してみたい。

浦所周辺の窯址を考察対象としたのは、貿易品として文献史

料をもつて確認したいことから浦所やその周辺地域で取引された可能性が高いと考えるためである。その一環として本稿では、熊川窯・齋浦湾・（仮宿）の関連性を各遺跡から出土した陶磁関係の遺物を中心に日朝間の相互交流について具体的に検討する。

一 熊川陶窯址

熊川窯は、慶尚南道昌原市（二〇一〇年七月に馬山市と鎮海市を統合）熊東面頭洞山一四七番地一帯に位置しており、一九九七年一月に慶尚南道記念物第一六〇号と指定された。日本人が高麗茶碗（日本で茶陶として用いられた高麗末・朝鮮時代の陶磁器）の名品と称する（井戸）や（蕎麦）茶碗の生産地が熊川窯と見なされ、すでに盗掘による攪乱が甚だしく進んでいた。実際に熊川産の白磁碗が齋浦を経て日本に伝来され、武野紹鷗・千利休のような著名な茶人が茶陶として用いるようになって（井戸）茶碗と呼ばれるようになった。<sup>11</sup>【写真1】は現在の熊川陶窯址展示館の全景と窯址をあらわしたものである。



【写真1】熊川陶窯址展示館の全景 \* 展示館の背後が窯址 写真撮影筆者



【図表 1】熊川陶窯址と齊浦周辺地形図

(一) 立地条件と景観  
窯を築造するうえで、もつとも重要なのが立地条件である。

まず、良質の土・水・薪（燃料）、そして豊富な日射量および風に影響されにくい地形など、窯業を営む際に重要な部分を占めるのが自然環境である。

熊川窯の周辺には安山岩質火山角礫石が分布し、表土を構成する土壌は小礫を多く含んだ粘質土層であるが、粘度はそれほど強くないという<sup>②</sup>。熊川窯の背後の宝蓋山（通常、ボベ山という）の渓谷の水が窯の東側から南側を経て西側の池に注がれる。この他にも周辺にいくつかの池が形成されていることから窯を営むうえで十分な水原であったと見られる。現在は熊川窯の西南に広がる農地の農水として利用されている。そして熊川窯のすぐ西側の池から約一・五キロメートル西に離れている熊東湾まで水路がつながっている。

【図表 1】は熊川窯と齊浦周辺の地形図であるが、本稿で扱う主な地域を示したものである。一九九〇年代から熊東湾と齊浦湾（現在は熊川湾という）一帯に干拓事業が進められ、相当部分が埋め立てられているが、特に齊浦湾と南山、熊東湾の海岸線の地形がかなり変わっている。

【図表 1】のように熊川窯は、宝蓋山（海拔四七八・九メートル）の山麓丘陵部に位置し、北には馬峰山、南には夫人山（龍院ゴルフ倶楽部）に囲まれている。周辺一帯には松とタヌギなどで大きな森が形成されている。周辺の山林は豊富な薪を提供するだけではなく、北風や南からの海風を遮断する役割を果たす。

次に交通の便宜と周辺地域における販路の存在である。生産した陶磁器を水路や陸路で熊東湾まで搬出すれば、次は船でどこへでも運搬することができたはずである。また、背後の宝蓋

山には頭洞峠があり、そこを越えれば金海の長有につながるの  
で、窯業を営むうえで良い地理的条件を備えていた。

特に後述するように朝鮮政府が日本人に齋浦を開港していた  
時期（一四〇七年頃〜一五四四年）と熊川窯の操業時期（一五  
世紀半ば〜一六世紀）がほぼ一致するという点は注目される。  
三浦のなかで日朝貿易によつて、もつとも栄えた齋浦は熊川窯  
から直線距離で約七キロメートル離れたところに位置する。そ  
して、豊臣秀吉の朝鮮出兵時に築造された熊川倭城のすぐ北側  
の熊浦は主に朝鮮の水軍や周辺住民が使用した港であろう。こ  
のような絶好の立地条件のもとで地域住民はもちろん、齋浦の  
恒居倭や日本人通交者は、熊川窯関係者からみると販路として  
非常に魅力的な存在であつたに違いない。

ところで、片山氏は熊川窯の製品の大部分は在地販売を目的  
に生産したとし、そのうち一部が日本で茶陶として用いられた  
に過ぎないとする。<sup>17</sup> すなわち、貿易を目的に陶磁器を生産した  
可能性は希薄であるという見解である。

それならば、熊川窯が操業をはじめた頃の熊川地域の人口を  
調べてみる必要がある。世祖六年（一四六〇）六月に熊川  
城底に三一〇戸、男丁四一〇人の住民がいると報告されてい  
る。<sup>18</sup> 城底とは城の外一〇里、または一定の距離という意である  
ので、熊川県に属した大部分の住民が含まれた数値と判断され  
る。男丁以外の正確な人口を把握することは難しいが、ほぼ

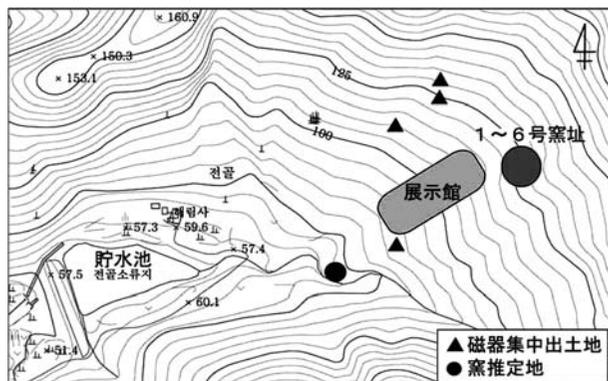
同じ時期の齋浦倭人（恒居倭）と比較してみると、世祖一二  
年（一四六六）には戸が三〇〇、人口が一二〇〇人余り、成宗  
二五年（一四九四）には戸が三四七、人口が二五〇〇人に達し  
ている。<sup>19</sup> その他にも後述するように齋浦には年間数千人の倭人  
が往来していたので、熊川に窯を築造する際にこれらの倭人の  
存在が十分に考慮されたと考えられる。

もちろん、交通の便の良さを勘案すれば、熊川以外の周辺地  
域も販路として念頭に置いたであろうが、金海・釜山・梁山・  
陝川・晋州・泗川などの周辺地域の粉青沙器関連の窯でもほぼ  
同じ時期に生産活動を活発に行っていたので、熊川以外の地域  
に流通した量はそれほど多くはなかったと思われる。

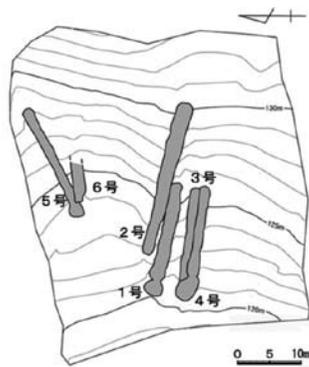
したがって、窯を営むのに適切な自然環境と交通の便宜、販  
路として熊川の地域住民だけでなく多くの倭人の存在が熊川に  
窯を築造することになった主要な要因であると判断される。

## （二）登窯の分布と特徴

二〇〇一年四〜七月にかけて実施された試掘調査の際、二  
基の窯が確認された。一号基は二号基を調査する過程で見発  
され、このうち二号窯を中心に窯の内部構造および遺物に対  
する分析が行われた。しかし、盗掘によつて深刻な攪乱状態  
であつたため、層位による遺物の収集が困難であつたといふ。<sup>20</sup>  
二〇〇一年の試掘調査後の報告書Ⅰでは「熊川磁器窯址」と



【図表 2】熊川陶窯址と周辺地形図



【図表 3】登窯配置図

\* 【図表 2・3】は李ソンヒョン 註(7)論文より引用した。

あり、翌年に実施された発掘調査後の報告書Ⅱでは「熊川陶窯址」と名称変更しているが、一般には「熊川窯址」または「熊川窯」と呼ぶ。【図表 2】のように窯址は、熊川陶窯展示館の東側に位置し、【図表 3】のように六基の窯が確認され調査が行われた。その他にも展示館の西側に窯址推定地があるが、発掘調査は行われていない。面積に比して窯の分布、運営期間に比して総生産量などから見れば、現在まで調査された粉青沙

器窯のなかでも窯が非常に稠密に分布していると言われる<sup>21)</sup>。もちろん、六基の窯を同時に運用してはいないが、実際に現地調査を通じて狭い範囲に登窯が密集していることが確認できた<sup>22)</sup>。六基の窯は、【図表 3】のように 1・2号、3・4号、5・6号基がそれぞれ部分的に重なった状態で発見され、そのうち 3号窯の半分程度が 4号窯の下敷きになっていたため、3号基に対する調査は行われていない<sup>23)</sup>。それぞれの上位に位置する窯は、いずれも改・補修が行われており、その過程で窯の全長と幅が縮小された<sup>24)</sup>。発掘調査後、【写真 1】のように 4号窯以外はすべて元に戻され、昌原市（熊川陶窯展示館）が保存管理している。

熊川窯の特徴は、高麗時代の青磁窯で用いた〈単室窯〉の形式を継承している点であり、その規模が特に大きい 2号窯の場合、長さ二四・五メートルで粉青沙器を製作した窯としては一般的な大きさであるが、青磁窯よりは規模が大きく大量生産が可能であった。

〈単室窯〉は、窯の入口から奥までの温度を一定に保つことがかなり難しいため、高度な技術を身に付けた陶工集団でなければ、使用が困難なものであった。そのため、現在の熊川陶窯展示館に再現されている窯は、外見は〈単室窯〉の形式を採用しているが、内部は〈分室窯〉の形式で作られている。朝鮮において〈単室窯〉は一五・一六世紀に使われており、一五世紀

末く一九世紀には（分室窯）を、一九世紀以後は（連室窯）が主に使用された。<sup>26</sup> また、熊川窯では匣鉢（日本で言うサヤ）などの補助道具を使用せず、【写真2】のように陶枕を使用して重ね焼きをしたことからみれば、日用雑器を生産した民窯であったことがわかる。

### （三） 出土遺物

二〇〇一年度の試掘調査の際に出土した全体遺物の八五パーセントほどが粉青沙器（粉粧灰青沙器の略称）であり、その他一〇〜一五パーセント程度が白磁で、きわめて例外的な遺物として一〇点未満の黒釉磁器が発掘された。<sup>27</sup> 熊川窯は、粉青沙器（以下、粉青と略称）窯と言っても過言ではないほど遺物の大部分を粉青が占めている。

一九三〇年ごろ美術史学者である高裕燮氏が器物の特徴を検討して「粉粧灰青沙器」と命名したが、これを「粉青沙器」と略称して日韓両国では学術用語として用いられている。韓国では製作技法別に名称が分けられているが、日本ではそれぞれの特徴をとりあげ、〈三島〉〈井戸〉〈熊川〉〈蕎麦〉などと名称が細分化されている。粉青は白磁とともに朝鮮陶磁の主流をなすもので、一四世紀中頃に象嵌青磁から自然に発生し一五世紀前半には多様な技法が発展して一六世紀前半頃に白磁に吸収されていった。<sup>28</sup> 一五世紀は朝鮮粉青の全盛時代と言われるほど全国



【写真2】熊川窯の刷毛目粉青と陶枕



【写真3・4】重ね焼きの痕跡

#### \*写真撮影筆者

各地で粉青が多様な技法で製作された。<sup>29</sup> 【写真2】は、熊川窯で発掘された刷毛目粉青と陶枕であり、【写真3・4】には器物の間に耐火土目や砂を挟んで重ね焼きをした痕跡が残っている刷毛目粉青片である。

白土の粉装方法や技法によってそれぞれの特徴を現わすが、模様には象嵌技法、印花技法、剥地技法、彫花技法、鉄画技法、刷毛目技法、粉装技法などがある。とりわけ、印花粉青は、全羅道の粉青窯址でも出土しているが、主に慶尚道地方の粉青窯址において大量に出土していることは、<sup>30</sup> 日朝陶磁交流を検討する際に

留意すべき点である。粉青の胎土は木節粘土であり、釉薬は天然で得る生釉を用い、主成分として長石を使う<sup>35</sup>。

遺物には各種の大皿、小皿および飯床容器と各種の祭器、馬上杯、耳杯、花形盤、九折坂、鉢類、大盤、壺、すずり、硯滴などの特殊器種がある<sup>36</sup>。このうち、規格化されたどんぶりと皿が大量に出土した点が注目される<sup>37</sup>。片山氏は、朝鮮時代の使用形態からみれば、特異な直径一一センチメートル前後、高さ三センチメートル程度の小皿（二二四八点出土）に注目して、大きさが当時日本人々が好んで使っていた中国の染付と似ており、西日本各地の遺跡において少なくない数が出土しているという<sup>38</sup>。また、器物の種類には簡略化が進んだ印花粉青、刷毛目粉青、灰青沙器、軟質白磁などがある。

ところで留意すべきことは、現在の熊川陶窯展示館の展示品の相当数は熊川窯址で発掘されたものではなく、他地域の遺物を購入して展示している点である。前述したように発掘調査当時、すでに盗掘によって甚だしく攪乱され、完成品がほとんどなかったためである。熊川窯の実態調査するには適切な資料ではなかったため、二〇一三年三月に東釜山大学の金炫式教授の案内で昌原市鎮海区佳主洞において「熊川窯」という窯を営んでいる崔熊鐸氏を訪れた。崔氏は、かつて熊川窯の陶工が製作した陶磁を伝統的な方法で再現する作業を長年営んでいる。佳主洞は宝蓋山を挟んで熊川窯の反対側に位置し、窯址か

ら南東側に約一キロメートル離れたところである。崔氏は、熊川陶窯展示館よりも良質の粉青関連遺物を大量に所蔵しており、氏によると以前は大雨の後、山の谷間に陶磁片がたくさん流れてきたという。そして【図表一】龍院CC（龍院ゴルフ倶楽部）の土木工事の際にも少なくない陶磁関連遺物が出土したという証言があった<sup>37</sup>。そうだとすれば、実際には当時、熊川窯の他にも熊川地域には粉青沙器関連の窯が散在していたことになる。

崔氏の証言と配慮により、周辺地域の陶磁関連遺物の状況と熊川窯関連の遺物を直接調査することができた。遺物写真の一部を後掲して熊川窯―薺浦湾水中遺物―水崎（仮宿）遺跡の相互関連性について併せて検討する。

#### （四） 操業時期

熊川窯の操業時期について尹龍二氏は、一六世紀後半頃に井戸系統の茶碗を製作した可能性を言及しており<sup>38</sup>、慶南発展研究所歴史文化センターは試掘調査に基づいて「一六世紀」とする一方<sup>39</sup>、発掘調査後には一四五〇〜一五〇〇年を前後した五〇年間、すなわち「一五世紀後半」という見解を示している<sup>40</sup>。その理由として印花文を押し、その上に刷毛で粉装土を塗った後に表面の粉装土をきれいに除去していない衰退期の印花粉青と出現期の白磁が出土しているからだという<sup>41</sup>。また、同センター

は一五九二年の壬辰倭乱勃発前は粉青を、その後は白磁を生産する窯にその性格が変わっており、その過程で粉青沙器、灰青沙器、軟質白磁、粉青白磁、粉装沙器、黒釉磁器、甕器など多様な陶磁を生産したとする<sup>⑩</sup>。そうだとすれば、壬辰倭乱前後にも操業していたことになる。

一四世紀末、高麗から朝鮮へと王朝交替という政治的な混乱期に全羅道康津の磁器所（官窯）が一三七〇年代に解体され、その職人が全国各地に離散して、一三九二年に朝鮮が建国された頃には末期象嵌青磁から白土粉装による新しいジャンルの粉青沙器が誕生したというのが通説である<sup>⑪</sup>。

姜敬淑氏は、主に官窯で製作した粉青を検討してその製作時期を一四世紀半ば〜一六世紀前半に比定し、その特徴を掲げて第一〜四期に時期区分をしている<sup>⑫</sup>。粉青の出現と消滅に至る時期については諸説があるが、姜敬淑説によれば、熊川窯は第四期、すなわち一四六九〜一五四〇年頃がその操業時期に当たると判断される。しかし、熊川窯のような民窯の場合、官窯の製作技法を踏襲して陶磁器を作っていたことを考慮すれば、官窯のような技法で作られた陶磁器があると言ってもその製作時期は官窯より少し遅れた時期であったと見なければならぬ。なぜならば、熊川窯の地表調査の際に採集された遺物のうちに「長興庫<sup>⑬</sup>」と推定される「粉青沙器興銘皿片」（印花粉青）が一点収集された。これ以外は確認されておらず、一点だけ出土し

たということは、官窯の印花粉青が流行していた時期にそれを熊川窯にもたらし、その制作技法をまねて印花粉青を作っていたと判断される。

換言すれば、熊川窯は民窯であった点、粉青から白磁への移行期の遺物が少なくない点、一五四四年の蛇梁の倭変によって朝鮮政府が薺浦を閉鎖して一五四七年の〈丁未約条〉締結後に日本人に対する浦所を釜山浦一カ所に指定した点などは熊川窯の操業時期を検討する際、充分に考慮されなければならない。

特に薺浦の閉鎖は、熊川窯の人々にとっては大きな販路を失う結果を招き、当地における窯業が衰退期に入り、壬辰倭乱を契機に窯の火が消え去ることになったと考えられる。したがって、熊川窯の操業時期は一五世紀半ば〜一六世紀とするのが妥当であろう。

## 二 薺浦の開港と交易の拡大

### （一）薺浦の開港と倭館

薺浦の開港と倭館、周辺住民との交易活動を含む交流などについては前稿において先行研究を参照しながら詳細に再検討したので、本節ではそれを簡略に整理する<sup>⑭</sup>。

朝鮮政府は、治安上の理由から太宗七年（一四〇七）七月以前に興利倭人に対して慶尚左右道都万戸所在地である釜山浦と

薺浦を浦所として指定した。その後、世宗八年（一四二六）に倭船渡泊港として蔚山の塩浦が追加され、あわせて三浦となった。<sup>⑩</sup>各浦所には使送倭人の接待と貿易を行う場として倭館が設置された。

浦所の倭館は、一般的に浦所と運命をともにして閉鎖されていたと考えられて来たが、その開始時期については太宗一八年（一四一八）<sup>⑪</sup>と世宗五年（一四二三）<sup>⑫</sup>とする説がある。浦所における倭館の定義については、一五世紀はじめまでは朝鮮政府でも明確に定着していないので、日本使節に対して浦所が制限されてから定着したと思われる倭館の定義について諸説があるのも無理ではない。しかし、倭館は日本使節の接待処と貿易処として一般に解されているので、その機能を果たし始めたのは使送倭人に対して浦所が指定された後からだと考えられる。

中村榮孝氏は、太宗一〇年（一四一〇）五月には、すでに使送倭人に対して慶尚道の沿岸を経由することが義務付けられていたことを明らかにしている。<sup>⑬</sup>使送倭船に対しては興利倭船のように薺浦（乃而浦）と富山浦（釜山浦）の両浦に限定されているが、慶尚道を経ることが義務付けられていたのではないが、慶尚道を経ることが義務付けられていたのである。

このような制限が始まった時期は、おそらく興利倭船に浦所を制限した時期、すなわち一四〇七年七月以前と推測される。なぜならば、朝鮮政府が興利倭人に対する浦所の指定理由とし

て掲げていたのが治安上の理由と国家機密の漏洩を防止するということであつたからである。<sup>⑭</sup>したがって、興利倭人だけ浦所を指定して使送倭人に対しては、従来通り任意に南部沿岸どこへでも停泊を許可したとは到底考えられない。

一四一九年の己亥東征（応永の外寇）に際して、一時閉鎖した浦所を再開港する際に使送倭人に対しても釜山浦と薺浦への停泊を義務付けたと考えられる。その時期については、世宗二年（一四二〇）閏正月に礼曹判書が対馬島主宗貞盛に送った答書に、これからは島主の「親署書契」を持参する者に限って接待を許すという旨が記されていることから、<sup>⑮</sup>少なくともこの時点では使送倭人に対しても浦所が指定されたと考えられる。これにともなつて使送倭人の接待と貿易を行う場として各浦所に正式に倭館が設置されたのであろう。

三浦体制は、一五一〇年の三浦の乱まで続いたが、乱後に朝鮮通交が断たれてしまった対馬側は足利將軍や大内氏の名義で使節を派遣して通交の復活を図った。<sup>⑯</sup>やがて中宗七年（一五一二）に日朝間に〈壬申約条〉が締結され、対馬は乱前の朝鮮関係諸權益が大幅に縮小されたものの、再び朝鮮通交が可能になった。この時の浦所は薺浦一カ所に限定され、中宗一二年（一五一七）に釜山浦が追加された。<sup>⑰</sup>

しかし、中宗三十九年（一五四四）四月の慶尚道の蛇梁の倭襲が起こった際にまたもや薺浦と釜山浦が閉鎖された。その後、

明宗二年（二五四七）の「丁未約条」が締結され、通交は回復したが、齋浦は開港されず、浦所は釜山浦一カ所だけになった。したがって、齋浦が倭人の渡泊港に指定された時期は、太宗七年（一四〇七）頃から中宗三十九年（二五四四）四月までの間であった。

## （二）齋浦の交易ネットワーク

この頃、朝鮮政府の悩みの種であったのが浦所の恒居倭であった。特に齋浦恒居倭が目立って増加していた。前述したように世祖十二年（一四六六）に戸が三〇〇、人口が一二〇〇であったのが、成宗二五年（二四九四）には戸が三四七、人口が二五〇〇人に達した。約三〇年の間、戸は一五・七パーセント増えたのに比して、人口は約二倍以上も増えており、他の浦所に比べて急増していた。これだけ多くの人々と年間数千に達する倭人が往来したのは、齋浦には彼らの期待に応えるだけの経済的な基盤が存在したからである。

日本から往来する倭人も齋浦への停泊を好んでおり、常に他の浦所に比べてその数が圧倒的に多く、朝鮮政府も貿易を含む彼らの接待などの問題で苦心していた。このような問題を解消すべく朝鮮政府は世宗二〇年（一四三八）二月と翌年四月に対馬島主宗氏に書簡を立て続けに送り、使送倭船と興利倭船を三浦に分泊させるよう要求した。<sup>58</sup> また、成宗二年（一四七一）

に申叔舟が編纂した『海東諸国紀』の「朝聘応接紀三浦分泊」条にも「対馬島主の歳遣船五〇隻のうち、二五隻は乃而浦（齋浦）に停泊させ、二五隻は富山浦（釜山浦）に停泊させるようにして、その残りの諸使はそれぞれ任意に三浦に分泊させる」と定めているが、齋浦への通交者が依然として多かった。

倭人通交者が次第に増えるにつれ、自然に交易の規模も拡大していった。成宗一七年（一四八六）に戸曹判書李徳量が増税の必要性を進言するなかに、倭人に対する回賜が歳に（布帛）五〇万匹を下らず、国家の二年の収入をもつて一年の歳費を支えることができなほどと述べている。<sup>59</sup> また、成宗一九年（二四八八）六月、戸曹判書鄭蘭宗は今夏三ヶ月の間、倭人に答賜した布帛が一〇余万匹に達しており、司贍寺に八〇余万匹しか残っておらず、三ヶ月の費用がこれほどなら国家の有限の財物で応え難いと憂慮している。<sup>60</sup>

この頃の倭人通交者の規模をみると世祖元年（一四五五）、一年間に使送倭人六一一六名が来朝していた。<sup>61</sup> 使送倭人の他にも興利倭人や恒居倭の船が昼夜を問わず往来していたので、実際にはこれよりも多くの倭人が朝鮮に往来していたはずである。

これほど多くの使送倭人が朝鮮に通交した理由は、「給料」や「過海料」を稼ぐためであったことは言うまでもないが、<sup>62</sup> それと並行して貿易による利益追求がもう一つの目的であった。

当該期の日朝貿易は大きく分けて、(a)進上と回賜、(b)公貿易(官貿易)、(c)私貿易の三形態で行われていた。とりわけ(a)は、書契に記載されていない使送倭人の進上品(私進上または私進物という。以下、私進上と略記)が次第に拡大していき、その対策を講じざるを得なくなった。成宗二年(二四九四)、朝鮮政府は私進上に対する議論を深め、結局、村井章介氏が指摘するように私進上を一切禁止する抑制策をとった。その代わりに私貿易を許す方針を固めたことにより、朝鮮政府の許可のもとで従来の私進上が(c)の市場に流されるようになった。これによつて、私貿易市場が一層活気を帯びるようになったに違いない。

村井氏も言及するように齋浦と熊川との経済的なつながりが朝鮮側にとつて無視できないレベルに達したのが一五世紀半ばとみられ、ちょうど熊川窯が操業を開始する時期に当たる。

世祖元年(一四五五)七月に前慶尚道觀察使黃守身が慶尚道と熊川県の地図を進上して齋浦の現状について述べている。それによれば、①齋浦倭人(恒居倭)と熊川住民との交流、②次第に増加する齋浦倭人および通交倭人、③禁止の教旨を下したにもかかわらず私商(浦所や周辺地域における私的な交易活動)と密貿易が絶えないこと、④これらによつて国事が漏洩している点などが問題視されている。また、成宗五年(一四七四)の司憲府大司憲李恕長の上訴に、三浦恒居倭と周辺住民との交

流はその歳月が久しく習わしとなつて忌避しないと云つていようように朝鮮の禁令というのは彼らにとつて、もはや有名無実のものであった。

三浦の乱の直前である中宗四年(一五〇九)頃には彼らの横行が一層甚だしくなり、熊川県の報平駅や東萊城底の民家が交易場として利用されていた。駅員や住民が朝鮮商人と倭人をつなく仲介をしていたのである。朝鮮商人は浦所の周辺民家や駅において短いものは一二年、長いものは三四年間も長期滞留しながら交易を行つており、また南道の民も農事を顧みず、工商に専念して安東の繭、金海の麻糸が倭人に列をなして運ばれている有様であつた。このような弊害に対して、同年四月に慶尚道敬差官として浦所を巡察した金勤思が齋浦倭人の横行について報告した。その際、柳洵ら八人の重臣は朝鮮商人が報平駅の駅員と熊川住民を頼つて倭人と交流しながら国事を漏らす弊害は少なくないが、交易の慣例はその由来が久しいので、一律に禁じてはいけなと言つていふ。ただ、相互間の交流によつて国家機密を漏らすことに対しては、国法に則つて厳禁すべき旨を述べている。交易活動と国家機密の漏洩は元々同じような人々と場所で行われていたものを前者は引き続き黙認して、後者は厳禁するというのは全くその対策とは言えない。

このような朝鮮政府の対応が慣例化し、三浦の乱の火種を扇いだのである。それにもかかわらず、乱後も朝鮮側の対応や倭



【図表 4】 齋浦湾（熊川湾）一帯

\* 沈奉謹・鄭義道 註(73)報告書の「図面 1 齋浦一帯測量図」「図面 2 遺構配置図」「絵図 4-2 探查結果による遺物の位置図」を参照して作成した。

人が憤慨して城内に入り、趙允玲を侮辱する事件が発生した。交易を口実に奪取行為をした僉使は従三品の武官職で地方官のなかでも高官に属

人の横行はあまり変わっていない。時には浦所を管轄する官員が交易活動に直接加担して、倭人を翻弄して侮辱されることが起こった。

齋浦が閉鎖された後の釜山浦の事例であるが、中宗二八年（二五三三）に釜山浦僉使趙允玲が留館倭人に貿易するように誘って大部分を着服して、その対価を支払わなかったため、倭

する。倭人や地域住民に威厳を見せて彼らを統率する任務に当たっていた辺将が私利私欲を追い求めたあげく、その威厳はもちろぬ、国家紀綱までも失墜させる事件であった。

### 三 齋浦湾の水中遺物

以上のように齋浦は一四〇七年頃～一五四四年の間、日朝貿易の正式舞台であった。それにもかかわらず、二〇世紀末になつてようやく齋浦湾（熊川湾）の水中発掘調査が行われた。それも【図表 4】のように齋浦湾の埋め立て工事がある程度進められた段階で ZONE I～IV の木柵が部分的に発見されたことにより、限定的な区域において調査が実施された。

一九九七年六～一二月の六ヶ月間にわたつて東亜大学校博物館の発掘調査団を中心に鎮海齋浦水中遺跡に対する発掘調査が行われ、報告書が刊行されている。以下、この報告書を参照しながら出土遺物について簡単に整理する。

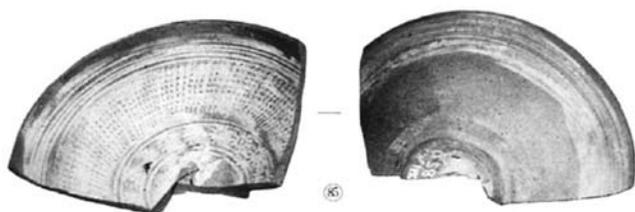
まず、木柵はいずれも恒居倭集落（現在の槐井村）の海辺を囲む形で設置されていた。世祖元年（一四五五）七月に右参贊黄守身が齋浦倭人の横行を遮断するため、倭人集落の周辺に築城することと水の浅い所に木柵を設置して倭人の出入りを制限しなければならぬという意見を提示したことがある。正確な時期はわからないが、その後に設置された一部の木柵が確認さ

れたものであろう。

調査当時、齋浦湾の満潮と干潮時の水面の高さは最高水位二四〇センチメートル、最低水位五センチメートルで、満潮時には木柵の大部分が水面下に沈み、干潮時に水面上にその一部が現われたという<sup>⑧</sup>。現在の海岸線に近接した位置で直径一〇〜一五センチメートル、長さ一五〇〜二〇〇センチメートル内外の木柱を縄で結束した木柵群が一五メートル前後の間隔で四ヶ所において確認されているが、設置当時の海岸線は現在よりも東側に一〇〇メートルほど離れた位置であったという<sup>⑨</sup>。水中木柵は、齋浦恒居倭と通交倭人が昼夜を問わず、自由に海へ出入りする行為をある程度制限する役目を果たしていたと思われる。

出土遺物としては、一五〇余点の陶磁片（うち青磁三点、白磁一九点、その他は主に粉青沙器片）、船体の破損品、木簡、青銅鏡、青銅製のさじ、鹿角などがある<sup>⑩</sup>。このなか特に注目されるのが粉青である。【図表4】の船体破損品と陶磁器発見区域において粉青が大量に出土したことからみれば、当該期に齋浦で取り引きされた対日貿易品の一端を占めていたと推定される<sup>⑪</sup>。

出土した粉青を種類別にみれば、大皿八五点中、印花技法が四八点（全体の五七パーセント）、象嵌技法が二九点（三四パーセント）、刷毛目技法が七点（八パーセント）、無文陶器が一



【写真5】齋浦湾 水中出土遺物 \*左：衰退期の印花技法 右：刷毛目技法  
\*沈奉謹・鄭義道 註(73) 報告書、311頁。



【写真6】水崎（仮宿）遺跡の印花粉青 【写真7】熊川窯の刷毛目粉青  
\*写真撮影筆者

点（二パーセント）であり、印花技法で製作されたものが主流をなしている。そして二四点の碗は、無文陶器が一点（四六パーセント）、印花技法が二〇点（四二パーセント）、象嵌技法が二点（八パーセント）、刷毛目技法が一点（四パーセント）

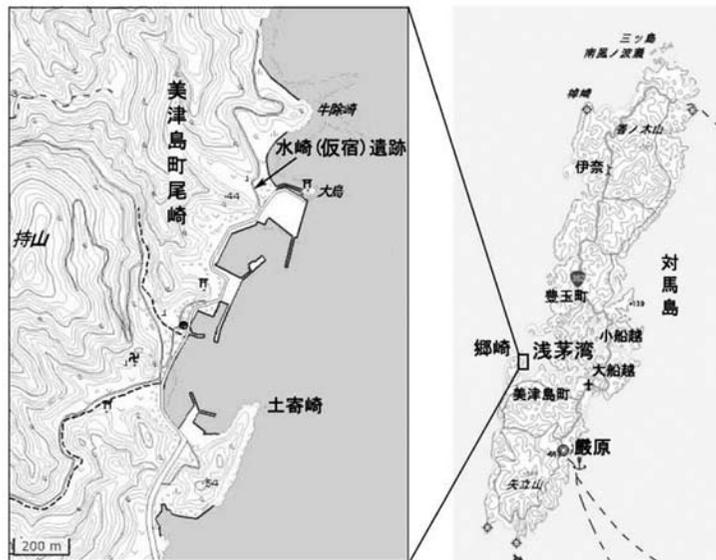
で印花技法と無文陶器が全体の八八パーセントを占める。また、器形は碗が二九点（二二パーセント）、梅瓶一点、壺一点に比べて大皿が一〇四点（七七パーセント）で圧倒的な優位を占めている<sup>⑩</sup>。

前述したように朝鮮の粉青は一四世紀後半〜一六世紀に作られたが、その製作技法によって時期をある程度推定することができる。齋浦湾で出土した粉青は製作技法別に数量の差はあるものの、粉青が作られた全時代の特徴を帯びているわけである。

ただし、一四世紀後半〜一五世紀前半の粉青、とりわけ象嵌技法の粉青は熊川窯では製作されていなかったため、齋浦を経た日本にもたらされた陶磁器の中には熊川窯だけではなく、他地域の窯から齋浦に流通されたものも少なくないことも留意すべき点である。

熊川窯との関連性については、片山氏は熊川窯産の軟質白磁が齋浦水中遺物に含まれており、その他の蓮花唐草文およびかなり大きい印花文を用いた初期の粉青が確認されたという<sup>⑪</sup>。初期粉青は熊川窯では確認されていないが、刷毛目技法や粉装技法、そして遺物数は相対的に少ないが、衰退期の印花技法で作された粉青は熊川窯と密接な関係があると思われる。

【写真5】は齋浦湾出土の印花（左）と刷毛目技法の粉青（右）、【写真6】は便宜上次の節でとりあげる水崎（仮宿）遺



【図表5】対馬市の水崎（仮宿）遺跡

みると作風はもちろん、規格化された高台と器物の大きさが相通ずることがわかる。そして【写真7】の齋浦湾の印花粉青と【写真6】の（仮宿）の印花粉青は衰退期の特徴をよくあらわしており、同じ窯で生産したものとと言っても過言ではないほど印花文および線の処理などがほとんど一致する。

跡の印花粉青、【写真7】は熊川窯の刷毛目粉青である。まず【写真2・3・7】の熊川窯の刷毛目粉青と【写真5】の齋浦湾の刷毛目粉青を比べて

#### 四 水崎（仮宿）遺跡

北部九州には高麗末・朝鮮前期に朝鮮半島に渡航した倭人がたくさんいた。特に対馬の人々は概して高麗末には倭寇活動をし、朝鮮建国後には日本の他の地域に比べられないほど通交者と通交回数が多く、貿易規模も抜きんでいた。対馬島主宗貞盛時代（在職…一四一八〜五二年）に島主宗氏によって島内支配体制の一元化が図られ、物流の都市博多にも進出して豪商らと手を結んだことにより、対朝鮮貿易にも大きな影響を及ぼすようになった。このため、博多遺跡群では中国産に次いで朝鮮産の陶磁器が多く出土している。

#### 李 勤 泰 勳

#### （一）遺跡の景観

対馬には古代〜近世の朝鮮半島との交流を検討する際、重要な遺跡群が散在する。特に高麗末・朝鮮前期の日朝交流を考察するうえできわめて重要な遺跡が【図表5】の対馬市美津島町尾崎に位置する水崎（仮宿）遺跡である。

【図表5】のように美津島町は島の中央部浅茅湾の内海東部から南西部にかけての一带に東西二〇キロメートル、南北二七・八キロメートルの広い範囲に位置する。北は浅茅湾を挟んで反対側の一部が豊玉町、南側は巖原町に接している。美津島町の海岸線は総延長二七五キロメートルで一つの行政区域の

海岸線としては日本で一番長いと言われる<sup>⑤</sup>。また、浅茅湾の中央北部に位置する烏帽子岳展望台から湾を眺めてみるとリアス式海岸線がよく現われていることが確認できる。『朝鮮王朝実録』にも対馬の自然環境について随所に記録されているように耕作地が少なく大部分が山岳地帯であり、まるで山々が海に浮かんでいる地形である。

遺跡から浅茅湾を出て右に上れば、対馬海峡（大韓海峡）を経て朝鮮半島に至り、左に下れば、東シナ海を経て中国の東海岸あるいは琉球（沖縄）や東南アジアに向かうことができる。また、逆方向で浅茅湾の奥へ入って行けば、陸上を船で越えられる大船越と小船越があり、島を大きく迂回せず東海岸へ船を移動させて杵岐や日本本土に向かうことができ、古より海上交通の要衝として栄えた地域である。今のように大船越を船が航行できるようになったのは対馬藩主宗義真が大々的な工事を実施して一六七二年に貫通させた時からである。

『海東諸国紀』には「可吾沙只（郷崎）浦有神堂、阿吾頭羅可知（大連河内）浦百余戸、可里也徒（仮宿）浦二百余戸、敏沙只（水崎）浦二百余戸、頭知洞（土寄）浦二百余戸」と尾崎地域を詳細に記録している<sup>⑥</sup>。朝鮮側は尾崎一帯に七〇〇余戸の村落が形成されていたことを把握していたのである。ある程度割り引いて考えても対馬島内において人口密度が高い地域として朝鮮側が認識し、関心を寄せていたと言えよう。実際に

一四一九年、倭寇の巢窟を討伐するために対馬に派兵した際、まさに仮宿付近に上陸した<sup>88</sup>ことを見ても朝鮮政府が倭寇と関連して尾崎地域に対して常に注意を払っていたことがわかる。

現在は遺跡周りに小さな漁村が形成されており、遺跡は葎が茂った草地に化してしまい、記録のなかの古の面影は見当たらないが、波止場から遺跡地の奥までサッカー場二つ分ぐらいの広い平地が形成されている。また、周辺にも倭寇の拠点とみられる大連河内遺跡、尾崎前原遺跡、亥ノ濱遺跡などいくつもの中世遺跡が点在する<sup>89</sup>。

## (二) 出土遺物

遺跡は第Ⅰ～Ⅷの土層からなり、第Ⅳの焼土層で出土した遺物の大部分が一五世紀前後の陶磁器で、第Ⅳ～Ⅵ層が一三～一五世紀前半の包含層といわれる<sup>90</sup>。また、第Ⅳ層には一四一九年、応永の外寇（己亥東征）の際の焼土層が含まれている<sup>91</sup>。当該期の柱穴などの遺構と金属製品、瑪瑙製の石帯を含め、陶磁器、朝鮮系の瓦、中国産の銭などが大量に出土した。なかんずく朝鮮時代の陶磁器出土の割合が全体陶磁器の六五～七〇パーセントを占めており、日本国内の中世遺跡群のなかでもかなり高い数値である。残りの大部分は中国産陶磁器であり、ベトナムや東南アジア産陶磁器も若干含まれている<sup>92</sup>。

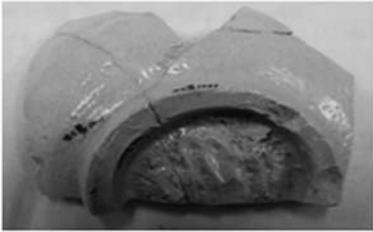
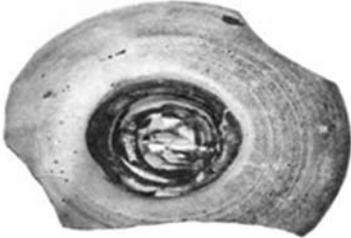
筆者は二〇一三年一月に長崎県対馬市教育委員会の配慮

で、直接遺物に対する調査を行う機会を得た。ただし、土器、陶器、磁器などの時代区分が充分に行われない状態で収集管理されていたので、遺跡の性格を正確にとらえることが難しかった。しかし、遺物を陶磁器に限定してみると器種と製作技法が多様な碗、鉢、皿、瓶、梅瓶、広口壺、偏壺などがあり、黒や白色の象嵌技法で製作された器物が少なくない<sup>93</sup>ことから、やはり一四世紀後半～一六世紀に朝鮮半島で製作されたものが圧倒的に多いことが確認できた。

象嵌青磁の場合、一四世紀半ば以降の製作技法や低質の胎土を用いたことにより表面が荒い作風をよく現わしていた。一方、粉青の場合は印花技法の衰退期、すなわち浅くて粗雑な印花文の上に刷毛で白土を塗ったもので、一五世紀後半以降に慶尚道地域で多く製作されたものが主流をなしている（【写真6】参照）。

熊川窯産との関係からみれば、前述したように軟質白磁のほか、刷毛目技法、粉装技法の粉青と衰退期の印花粉青の器形や作風が相通するものが多く、熊川窯の操業時期と合致する一五世紀後半以降の粉青が多数確認できた。

また、齋浦湾の水中遺物との関係から特記すべき点は器形や作風はもちろん、【写真8・9】のように高台の内側に人為的な痕跡が確認できた。これはおそらく生産地を現わすために施したものと考えられる。

	
	
<p><b>【写真 8】</b> 齊浦湾 水中出土遺物 *沈奉謹・鄭義道 註 (73) 報告書、 311-317頁。</p>	<p><b>【写真 9】</b> 水崎 (仮宿) 出土遺物 *写真撮影筆者</p>

とりわけ、齊浦―対馬の尾崎地域が日朝貿易船の主なルートであったということが明確にできる一つの発見と言えよう。その他にも片山氏によれば、〈仮宿〉では京畿道広州牛山里一七号窯産とみられる白磁象嵌片が出土しており、これは京畿道で生産された製品が慶尚道を経て日本に伝来されたものとする。<sup>94)</sup>

このように〈仮宿〉の陶磁関連遺物は熊川窯だけではなく、朝鮮半島各地で作られた陶磁器が日朝交流で栄えていた浦所を経て対馬に伝来されたことを物語ってくれる。

### (三) 遺跡の性格

世宗即位年(一四一八)に朝鮮の倭寇関連政策に協力的であった対馬島主宗貞茂が死亡した。その後を継いだ宗貞盛が島内の実権を掌握するまで島主宗氏をしのぐほどの権勢をふるっていたのが早田左衛門太郎であった。<sup>95)</sup> 尾崎一帯は、まさに早田氏が拠点を置き、その一族が活発に朝鮮通交を行っていた地域である。

この遺跡は、以前から倭寇活動と関連するものと理解されていたが、<sup>96)</sup> 近年、佐伯弘次氏は一五世紀半ばから一六世紀にわたって対馬の尾崎・仮宿地域には朝鮮―九州を結ぶ小さな流通の拠点が存在したという見解を示している。<sup>97)</sup> 倭寇活動によって伝来されたという従来の説を否定してはいないが、尾崎地域を拠点にした朝鮮と九州を結ぶ貿易船によって伝来されたもの

も少なくないということである。

早田氏は、太宗一四年（一四一四）閏九月に「豆地浦（土寄）万戸早田」が朝鮮に使者を派遣した記録を皮切りに時々遣使して被虜人送還に伴って交易活動を行っていた。これ以前は倭寇的活動をしており、朝鮮通交を活発にし始めた世宗代には対馬の「賊中都万戸」、「賊首」、「賊万戸」などのように記録されている。早田氏は、伊奈で倭寇活動をしていた時期から世宗即位年（一四一八）までは主に尾崎の土寄を拠点に活動しており、左衛門太郎が対馬島内の実権を掌握した後は小船越に拠点を移した。そして左衛門太郎の死後、平茂統、中尾五郎などが再び土寄に拠点を置いた。そうだとすれば、世宗代（治世：一四一八〜一五〇年）の一部の時期を除けば、主な活動舞台は尾崎地域であり、従来から言われるように水崎（仮宿）遺跡は早田氏が朝鮮と九州を結ぶ中継貿易を行う際に使用した倉庫であつたに違いない。

世宗代は、通交倭人に対する統制策を取り始めており、一定のルールに則って日朝間の通交と貿易が軌道にのり、貿易規模も次第に拡大していった時期であつた。まさに〈仮宿〉で大量に発掘された朝鮮産の陶磁器は、このような背景のもとで対馬に伝来されたものである。前述したように多様な器物が出土したことから、陶磁貿易が活発に行われていた産物と言えよう。しかし一方では、もし日朝間に大量に陶磁貿易が行われていた

とするならば、博多遺跡群でみられるように同一形状や技法をもつ器物が結集された状態で出土されなければならないとも考えられがちであろうが、必ずしもそうとは限らない。なぜならば、朝鮮から輸入した陶磁器は対馬で使用する目的よりも大部分を日本本土へ運ぶためのいわゆる「貿易中継地」が〈仮宿〉であつたからである。

したがって、〈仮宿〉で朝鮮と九州の中継貿易を行っていた貿易船が荷あらしめをする過程で、あるいは運ぶ過程で破損したものを廃棄処分したのが、遺物として出土したと考えられる。これは住居関連遺跡ではなく、倉庫と思われる建物があつた遺構から大量に出土したために可能な推測である。

すなわち、水崎（仮宿）遺跡から出土したのは対馬の人々の生活陶磁器として使うために伝来されたものもあるが、その大部分は日本本土へもたすために輸入したと考えられる。また、博多遺跡群からは必ずと言ってよいほど一五〜一六世紀の朝鮮産の陶磁関連遺物が出土している。このようなことからみれば、仮宿地域を含む対馬の各地を経由して博多に伝来された陶磁器が多数含まれていたと考えられる。

おわりに

以上で熊川陶窯址と齋浦、そして対馬の水崎（仮宿）遺跡から出土した粉青を中心に一四世紀後半〜一六世紀の日朝陶磁交流について考察してみた。粉青の交易に関する文献史料が皆無に近いなか、難しい点もあったが、近年の発掘調査の成果と現地調査に基づいて、交流の一端を明らかにすることができたと思う。

勳 陶磁器を製作するために陶工たちが熊川頭洞地域に登窯を築いた最大の理由は窯を営む上で必要な立地条件、販路として周辺住民はもちろん、齋浦倭人（恒居倭）や通交倭人が考慮された結果と考えられる。そして、熊川窯では一五世紀半ば以降から一六世紀にかけて主に粉青をはじめとする陶磁器を生産したが、齋浦湾水中発掘調査の際に引き上げられた遺物と比較検討した結果、軟質白磁を含む粉青の器形と作風が相通するものが少なくないことが確認できた。

李 一つ留意すべき点は、熊川窯は齋浦にもっとも近接する窯であったが、齋浦湾の水中遺物には一四世紀後半〜一五世紀前半にわたって製作された粉青も含まれていることである。これは初期粉青の場合、他の地域から齋浦にもたらされたものが少なからずあって、このような陶磁貿易状況を見守っていた陶工たちが熊川に粉青窯を築くようになったと推測される。

とりわけ、成宗二五年（一四九四）には使送倭人の私進上が禁止されているが、これも陶磁貿易を含む私貿易が活性化する大きなきっかけとなったはずである。

日本各地から朝鮮に往来した通交倭人は初期には生活陶磁器として購入していたものを、次第に日本での需要が高まっていくにつれ、当時朝鮮通交をもっとも活発に行っていた対馬の通交者によって対馬を経由して日本本土（特に博多）にもたらされたものが多いと考えられる。

当時、日朝中継貿易の拠点のなかの一つが早田氏一族が長い間拠点を置いていた尾崎地域であった。まさに早田氏の拠頭に位置する水崎（仮宿）遺跡から主に慶尚道地域で盛んに作られていた印花粉青、とりわけその衰退期のそれが出土した。これは当該期、朝鮮政府が日本人に対して指定した三浦、すなわち齋浦（乃而浦）、富山浦（釜山浦）、塩浦がいずれも慶尚道に属しており、主にその周辺地域の窯で生産された陶磁器が交易の対象になっていたことを裏付ける。

熊川窯を含む慶尚道の粉青窯―齋浦<sup>㉔</sup>―対馬―博多を主な交易ルートの一つとして朝鮮の陶磁が日本に伝来されたのである。その需要に応えるべく、熊川窯の陶工たちは窯の改・補修を重ねながら、少なくとも一五世紀後半から一六世紀まで生産活動を続けていたと考えられる。

## 註

- (1) 鄭澄元『慶南地方陶磁器の研究』釜山大学大学院碩士學位論文、一九六八年。申京均『조선시대 地方 가마에 관한 研究』慶星大学校美術學碩士學位論文、一九九二年などがある。
- (2) 慶南発展研究院 歴史文化センター『鎮海熊川磁器窯址(Ⅰ)―鎮海市熊東面 頭洞里 熊川 磁器窯址 試掘調査 略報告書―』二〇〇一年。
- (3) 慶南発展研究院 歴史文化センター『鎮海熊川陶窯址Ⅱ』二〇〇四年。
- (4) 李鉉淳『朝鮮前期 対日交渉史研究』(財)韓国研究院、一九六四年。中村榮孝『日鮮関係史の研究』上、吉川弘文館、一九六五年。同『日本と朝鮮』至文堂、一九六六年。村井章介『中世倭人伝』岩波新書、一九九三年。同『日本中世の異文化接触』東京大学出版会、二〇一三年。関周一『中世日朝海域史の研究』吉川弘文館、二〇〇二年。同『対馬と倭寇―境界に生きる中世びと―』高志書院、二〇一二年。李宗峯『조선전기 齊浦의 倭人 과 활동』(『지역과 역사』二二、釜慶史研究、二〇〇八年)。李泰勳『朝鮮前期(齊浦) からみた日朝交流』(『九州産業大学 国際文化学部紀要』五七、二〇一四年) などがある。
- (5) 長崎県美津島町教育委員会『美津島町文化財調査報告書 第8集 水崎遺跡』一九九九年。
- (6) 長崎県美津島町文化財保護協会『美津島町文化財保護協会調査報告書 第1集 水崎(仮宿)遺跡』二〇〇一年。
- (7) 韓日文化交流基金・韓日関係史学会『한·일 도자문화의 교류양상』(景仁文化社、二〇〇五年)。이성현 「진해 옹천 자기 가마에 대한 고찰」(『慶南研究』四、慶南発展研究院 歴史文化センター、二〇一一年)。
- (8) 片山まび「高麗・朝鮮時代の陶磁生産と海外輸出」(『アジアの考古学 1 陶磁器流通の考古学―日本出土の海外陶磁―』高志書院、二〇一三年) などがある。
- (9) 日本側の茶会記に登場する高麗茶碗(高麗末・朝鮮時代に生産された粉青沙器が大部分)、古唐津、そして文祿・慶長の役前に北部九州地方で運用された朝鮮式登窯やその遺物に関する研究はある程度蓄積されているが、朝鮮産陶磁の流通に関する研究は少なくない課題を残していると考えられる。
- (10) 片山まび前掲註(7) 論文。
- (11) 前掲註(2) 報告書Ⅰ、三・四九頁。
- (12) 片山まび「高麗・朝鮮時代の白いやきもの」(『出光美術館館報』一六一、二〇一二年) 一七頁。
- (13) 前掲註(2) 報告書Ⅰ、五頁。
- (14) 李泰勳前掲註(4) 論文。
- (15) 片山まび前掲註(7) 論文、一九二・一九三頁。
- (16) 『世祖実録』六年(一四六〇) 六月辛亥(六日) 条。
- (17) 社団法人世宗大王記念事業会編『한국고전용어사전』三、二〇〇一年、五六三・五六四頁。
- (18) 『海東諸国紀』「三浦禁約」条。
- (19) 『成宗実録』二五年(一四九四) 一〇月庚辰(二五日) 条。

(19) 尹龍二「茶碗과 관련된 重要窯址의 說明」(『成大史林』五、一九八九年)。

姜敬淑「初期 粉青沙器가 마더 분포에 대한 一考察 (I)」(『泰東古典研究』一〇、一九九三年)。

(20) 前掲註(2) 報告書I。이성현前掲註(7) 論文。

(21) 前掲註(3) 報告書II、二二〇頁。

(22) 筆者は二〇一二年八月に東釜山大学の金炫式教授の案内で、東義大学校の白泰京教授とともに現地調査を実施して、また熊川陶窯展示館の朴知慧氏(昌原市文化芸術課)から発掘調査当時の状況と展示物について説明を受けた。

(23) 前掲註(3) 報告書II、二二〇・二二二頁。이성현前掲註(7) 論文。

(24) 前掲註(3) 報告書II、二二〇～二二二頁。

(25) 前掲註(2) 報告書I、四六頁。前掲註(3) 報告書II、二二三頁。

(26) 熊川陶窯展示館の朝鮮時代の窯の形式に関する説明文を参照した。

(27) 前掲註(2) 報告書I、一五頁。

(28) 高裕燮「고려도자와 조선도자」(『又玄 高裕燮全集』二、朝鮮美術史下、열화당、二〇〇七年、三七一～三八九頁)。

(29) 申京均は「熊川茶碗」と熊川窯との関係を否定しているが、「井戸茶碗」は熊川窯で生産したものと解している(申京均前掲註(1) 論文)。

(30) 粉青の成立時期に関しては諸説があるが、本稿では姜敬淑説に依ることとした(姜敬淑『韓国のやきもの—先史から近代、土器から青磁、白磁まで』淡交社、二〇一〇年、一一八頁)。

(31) 『世界陶磁全集19 李朝』(小学館、一九八〇年、一三七頁)。尹龍二前

掲註(19) 論文、姜敬淑論文。

(32) 姜敬淑前掲註(30) 著書、一一二・一二三頁。

(33) 姜敬淑前掲註(30) 著書、一一九頁。

(34) 前掲註(3) 報告書II、二二五～二二九頁。

(35) 前掲註(2) 報告書I、一五頁。

(36) 片山まび前掲註(7) 論文、一九二・一九三頁。

(37) 龍院ゴルフ倶楽部付近の陶磁遺物に関する調査報告について、現在のところ確認されたものはない。

(38) 尹龍二前掲註(19) 論文、一八七頁。

(39) 前掲註(2) 報告書I、四七・四八頁。

(40) 前掲註(3) 報告書II、二二五・二二三頁。

(41) 前掲註(3) 報告書II、二三〇～二三二頁。

(42) 前掲註(3) 報告書II、二二五頁。

(43) 姜敬淑前掲註(30) 著書、一三三頁。

(44) 姜敬淑前掲註(30) 著書、一三三～一五〇頁。また姜氏の以前の研究では、粉青の製作時期を二一六〇～二一六〇〇年に推定しているが(『韓国美術シリーズ11 韓国の粉青沙器』近藤出版社、一九八七年)、本稿では姜氏の近年の研究に依った。

(45) 片山まび「朝鮮時代前期の陶磁研究史ノート—解放後、韓国における成果から—」(『陶説』五二七、日本陶磁協会、一九九七年)。

(46) 貢納用粉青沙器に「長興庫」と刻み始めたのは一四一七年からである(『太宗実録』一七(一四一七) 四月丙子(二〇日) 条)。

- (47) 当時、貢納用粉青沙器の盗用と私蔵を防止するために器物の表面に長興庫をはじめ、恭安府、敬承府、仁寧府、徳寧府、仁寿府、内資寺、内贍寺、礼賓寺などの納付官庁名と貢納する地方名を刻ませていた。地方名としては、高靈、陝川、慶州、蔚山、星州、慶山、密陽、昌原、梁山、晋州などがあり、大部分を慶尚道地域が占めていた（田勝昌「조선 전기의 도전과 위연, 분청사기와 백자」(国史編纂委員会『한반도의 흙, 도자기로 태어나다』景仁文化社、二〇一〇年、二五四・二五五頁)。
- (48) 片山まび「二六世紀後半〜一七世紀初の朝鮮陶磁の生産・流通・需要―慶尚南道地方を中心に―」(『関西近世考古学研究』関西近世考古学研究会、二〇〇九年)。
- (49) 李泰勳前掲註(4) 論文。
- (50) 中村栄孝前掲註(4) 一九六五年著書、四八四頁。
- (51) 張舜順『조선시대 왜관년천사 연구』(全北大学校史学科文学博士学位論文、二〇〇一年、二二・三三五頁)。韓文鍾「조선전기 왜관의 설치와 기능」(韓日文化交流基金・東北亜歴史財団編『한일 관계속의 왜관』景仁文化社、二〇一二年)。
- (52) 村井章介前掲註(4) 一九九三年著書、八二頁。
- (53) 『太宗実録』一〇年(二四一〇)五月癸酉(七日)条。中村栄孝前掲註(4) 一九六五年著書、四八四頁。村井章介前掲註(4) 一九九三年著書、八一頁。
- (54) 『太宗実録』七年(二四〇七)七月戊寅(二七日)条。
- (55) 『世宗実録』二年(二四二〇)閏正月壬辰(二三日)条。
- (56) 田中健夫「中世日鮮交通における貿易権の推移」(『中世海外交渉史の研究』東京大学出版会、一九五九年)。
- (57) 長節子氏は、釜山浦の再開港時期を一五二二年という従来の通説を再検討して、実際には一五一七年に釜山浦が再開港されたという見解を示している(長節子「壬申約条後の釜山浦再開港時期について」李泰勳・長節子「朝鮮前期の浦所に関する考察」『九州産業大学 国際文化学部紀要』三四、二〇〇六年)。
- (58) 『世宗実録』二〇年(二四三八)二月己巳(一日)条。同書二二年(二四三九)四月甲辰(二七日)条。
- (59) 『成宗実録』一七年(二四八六)十一月辛亥(二〇日)条。
- (60) 『成宗実録』一九年(二四八八)六月丁亥(二五日)条。
- (61) 『世祖実録』元年(二四五五)二月己酉(八日)条。
- (62) 成宗二五年(二四九四)四月の慶尚道觀察使李克均が対馬島主および諸酋の使臣が小船に乗って来て密かに三浦倭人の大船に乗り換えて、大船の糧を受け取る弊害について報告した際、金応箕などが「庚戌年(成宗二・一四九〇)に來た倭船一六四隻のうち、大船が一六〇、小船が四であり、辛亥年(成宗二・一四九一)に來た倭船一六五隻のうち、大船が一六二、小船が三」であったと報告している。これを『海東諸国紀』の「使船大小船夫定額」条によって計算してみると、庚戌年に六五二〇人分、辛亥年には六五七〇人分の「給料」(滞留費)と「過海料」(渡航経費)が支給されたことになる。もちろん、これは朝鮮官

憲を騙して船体の尺量を受けて大船の糧で滞留費と渡航経費をたくさん受け取るための横行が露呈されたことなので、実際に渡航した使送倭人数はこれよりも少なかったと考えられる（『成宗実録』二五年四月己未朔条）。

(63) 村井章介前掲註(4) 一九九三年著書、一二七頁。金東哲「15세기 부산포왜관에서 한일 양국민의 교류와 생활」(『지역과 역사』二二、二〇〇八年)。

(64) 『成宗実録』二五年(二四九四)三月丁未(二八日)条。  
(65) 村井章介前掲註(4) 一九九三年著書、一三〇・一三一頁。

(66) 『成宗実録』二五年(二四九四)三月丁未(二八日)、同己酉(二〇日)、同辛亥(二二日)、同丁巳(二八日)、同書同年四月乙丑(七日)、同丙寅(八日)、同戊辰(二〇日)条。

勳 泰 李

(67) 村井章介前掲註(4) 一九九三年著書、一六六頁。  
(68) 『世祖実録』元年(二四五五)七月乙未(二二日)条。

(69) 『成宗実録』五年(二四七四)一〇月庚戌(二八日)条。

(70) 『中宗実録』四年(二五〇九)三月丙辰(二四日)条。

(71) 『中宗実録』四年(二五〇九)四月癸亥(二日)条。

(72) 『中宗実録』二八年(二五三三)六月甲戌(三日)条。

(73) 沈奉謹・鄭義道『鎮海齊浦水中遺蹟』東亜大学校博物館、一九九九年。

(74) 『世祖実録』元年(二四五五)七月乙未(二二日)条。

(75) 沈奉謹・鄭義道前掲註(73) 報告書、二七頁。

(76) 沈奉謹・鄭義道前掲註(73) 報告書、六一・七二・二〇二頁。

(77) 沈奉謹・鄭義道前掲註(73) 報告書、二〇二頁。

(78) 沈奉謹・鄭義道前掲註(73) 報告書、五九頁。

(79) 沈奉謹・鄭義道前掲註(73) 報告書、二〇三頁。

(80) 片山まび前掲註(7) 論文、一九〇頁。

(81) 長節子『中世日朝関係と対馬』吉川弘文館、一九八七年。荒木和憲『中世対馬宗氏領国と朝鮮』山川出版社、二〇〇七年。

(82) 佐伯弘次「大内氏の筑前国支配―義弘期から政弘期まで」(川添昭二編『九州中世史研究』1、文献出版、一九七八年)。伊藤幸司「日明・日朝・日琉貿易」(大庭康時編『中世都市博多を掘る』海鳥社、二〇〇八年)。  
(83) 大庭康時『中世日本最大貿易都市・博多遺跡群』新泉社、二〇〇九年、七四・七五頁。

(84) 関周一前掲註(4) 二〇一二年著書、五九頁。

(85) 長崎県美津島町文化財保護協会前掲註前掲註(6) 報告書、一頁。

(86) 『新對馬島誌』新對馬島誌編集委員会、一九六四年。

(87) ( ) の表記は中村榮孝前掲註(4) 一九六五年著書、四〇六〜四三〇頁。申叔舟著・田中健夫訳注『海東諸国紀』岩波書店、一九九一年。佐伯弘次「中世の尾崎地域と早田氏」(前掲註(6) 報告書) において比定している尾崎一帯の地名である。

(88) 当時、朝鮮軍は対馬の「豆知浦」(土寄) に上陸した(『世宗実録』元年(二四一九) 六月癸巳(二〇日) 条)。

(89) 長崎県美津島町文化財保護協会前掲註前掲註(5) 報告書、三頁。

(90) 長崎県美津島町文化財保護協会前掲註前掲註(6) 報告書、六〜一〇頁。

- (91) 長崎県美津島町文化財保護協会前掲註前掲註(6) 報告書、六頁。関周一前掲註(4) 二〇一二年著書、六一頁。
- (92) 佐伯弘次前掲註(87) 論文。
- (93) 長崎県美津島町文化財保護協会前掲註(6) 報告書、五〇頁。
- (94) 片山まび前掲註(7) 論文、一八九頁。
- (95) 田中健夫前掲註(56) 著書。中村栄孝前掲註(4) 一九六五年著書。田村洋幸『中世日朝貿易の研究』三和書房、一九六七年。韓文鍾「조선전기 对馬 早田氏の 对朝鮮 通交」(『韓日関係史研究』一二、二〇〇〇年)。荒木和憲前掲註(81) 著書などがある。
- (96) 近年までも代表的な倭寇関連遺跡として認識されている(片山まび前掲註(7) 論文、一八八・一八九頁)。
- (97) 佐伯弘次前掲註(87) 論文。
- (98) 『太宗実録』一四年(二四一四) 閏九月壬戌(二二日) 条。
- (99) 前掲註(95) に同じ。
- (100) 『世宗実録』元年(二四一九) 一〇月戊子(二七日) 条。
- (101) 『世宗実録』一三年(二四三二) 十一月庚午(九日) 条。
- (102) 『世宗実録』二四年(二四四二) 二月丁酉(二一日) 条。
- (103) 田中健夫前掲註(56) 著書。同『中世対外関係史』東京大学出版会、一九七五年、一三六頁。中村栄孝前掲註(4) 一九六五年、著書。
- (104) 佐藤一郎「朝鮮半島陶磁器」(大庭康時編『中世都市・博多を掘る』海鳥社、二〇〇八年)。大庭康時前掲註(83) に同じ。
- (105) 本稿では、熊川窯に近接する齋浦を中心に検討したが、日朝間の陶磁

交流をより正確に分析するためには釜山浦や塩浦周辺の窯址に対する検討も今後さらに行われなければならないと思う。

#### 【付記】

本稿は、拙稿「熊川陶窯址と水崎（仮宿）遺蹟에서 본 朝日交流」(『韓日関係史研究』四八、二〇一四年) を一部増補・修正して、日本語訳したものである。